

四国運輸局では、消費者ニーズや消費者行政上の課題を把握し、その結果を行政に役立てていくことを目的として公共交通機関の利用者等を対象にインタビューを行っています。

今回は、香川県の高松～土庄航路で、バリアフリー対応の高速艇を導入された運航事業者と、この航路の高速艇利用者にお話を伺いました。

小豆島の概要

小豆島は瀬戸内海の東部に位置し、人口約31,000人、面積が約153.3km²あり、瀬戸内海では淡路島に次ぐ大きな島です。島の行政は土庄町と小豆島町の2町からなっています。

島は温暖な気候風土に恵まれた環境のため、オリーブ、しょうゆ・もろみ、佃煮、ごま油、そうめんなどの生産が盛んで、全国有数の生産地となっています。

特にオリーブは、国内栽培の発祥地として広く知られ、香川県の県花・県木にも指定されています。

観光では、小説「二十四の瞳」の舞台となった「岬の分教場」や、日本三大渓谷美の一つ「寒霞渓」、世界一狭い海峡としてギネスブックに認定された「土渕海峡」などの名所があります。

「小豆島ふるさと村」では毎年9月に全国各地から大きなカボチャが集まる「日本一どでカボチャ大会」が開かれ、優勝者には日本代表として世界大会に参加する権利が与えられます。

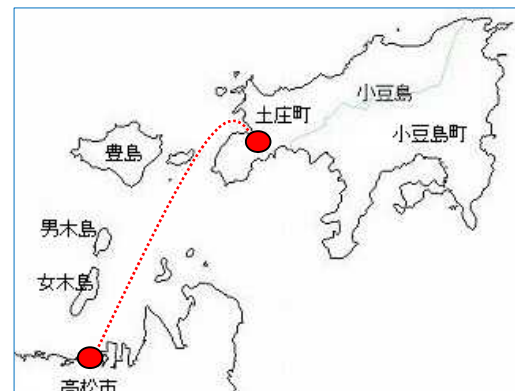
小豆島への交通手段は、関西方面からは、姫路～福田・神戸～坂手の2航路、夏期季節便として大阪～坂手航路(現在休航中)があります。岡山県からは、日生～大部・岡山～土庄・宇野～土庄の3航路、また、香川県(本土)からは高松～土庄・高松～池田・高松～草壁の3航路があります。



船舶・航路の紹介、事業者インタビュー

高松～土庄航路は、小豆島急行フェリー(株)が片道22kmをフェリーと高速艇で運航しています。

フェリーは、1日15往復あり、片道所要時間は約60分です。高速艇は、2隻運航で1日



16 往復あり、片道所要時間は約 30 分（又は 35 分）となっています。

高速艇・スーパーマリン概要

用途	旅客船	船質	軽合金	航行区域	平水区域
総トン数	95トン	全長	29.0m	全幅	5.8m
深さ	2.3m	航海速力	27ノット(時速約50km)		
就航日	H23・10・5	旅客定員	140人(座席115人・立席25人)		



◆新船スーパーマリンは従来と比べてどんな船ですか？

従来船が老朽化したことに伴い、より小型の船に入れ替えることで、燃料やメンテナンスにかかるコストを削減（従来船に対し燃料費が25～30%減）でき、環境にも優しいエコ対応のバリアフリー対応船を導入できました。

◆利用者からの反応や利用層は？

就航後約2ヶ月ですが、体の不自由な方や足腰の悪い高齢者からは、「通路が広く段差が無くなって良かった。」「車いすのまま乗船できトイレへ行くのも自ら移動して通路を通れるようになったので利用しやすくなった。」といった感想をいただいています。

バリアフリー対応船となったことで、盲導犬同伴の方や車いすの方の利用機会が増えています。

また、高速艇は移動時間が30分と短いので、平日は通勤や通院の利用が多く、特に朝夕の便は船内が混雑しています。



バリアフリー客席



障害者対応トイレ



車いす
スペース

バリアフリー
一出入口



バリアフリー
一乗降設備

利用者からの声

スーパーマリンの利用者からは、「前の船に比べて、通路が広いので移動しやすくなった。」、「手荷物を持っていても船内を移動しやすくなった。」、「同じ航路を走っている別の船より、バリアフリー船のスーパーマリンを選んで乗るようにしている。」、「通路が広いし段差が無くなって歩きやすい。」、「新船になってからは足腰への負担が少なくなった。」など、バリアフリー対応となったことで、特に体の不自由な方や高齢者からは利用しやすくなったとの声が多く寄せられました。

一方で、「座席数が少なくなり、座れなくなった。」、「船が小さくなった。」などといった声も聞かれました。

インタビューを終えて

高速艇は高松港に到着(11:50)後は棧橋に停泊中で、次の便の出航(13:00 発)までは、乗務する船員さんの休憩時間になっていました。

船は、前方と後方に分かれて客室があり、窓が大きく通路も広々とした明るく快適な船内で、地元の人に交じって小豆島のガイドブックを手にした旅行者と思われる夫婦の姿も見受けられました。

出航後は、女木島・男木島を横目に、備讃瀬戸東航路を行き交う大型船(全長 50m 以上)の船舶を見ていると、早くも、土庄港到着の入港案内が聞こえて来ました。

瀬戸内の島々を眺めながら過ごすには少し短く感じましたが、日々、通勤・通院等で利用されている方にとっては、快適な時間となりそうです。

利用者に話を伺って、バリアフリー化を必要としている方から、従来船(バリアフリー未対応)と比べ乗りやすくなったとの感想を多く頂き、バリアフリー船の必要性を強く感じました。

今後、さらに高齢化社会が進むなか、ハード面の整備とあわせ、ソフト面における高齢者や障害者等への理解と協力、すなわち「心のバリアフリー」についても一層の推進をしてまいります。

インタビュー実施日：平成 23 年 12 月 1 日(木)・聞き手：藤井、本木